

平成 21 年 6 月 18 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)

研究期間：平成 19 年度～平成 20 年度

課題番号：19830084

研究課題名(和文) 反芻に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) The social psychological study of rumination

研究代表者 八田武俊

研究成果の概要：

本研究では反芻と呼ばれるネガティブな体験を反復思考する認知パターンについて社会心理学的に検討した。本研究における第一の目的は、個人の反芻特性を測定するための反芻反応尺度や怒り反芻尺度について、日本語版を作成することであった。本研究の結果はそれらの十分な信頼性と妥当性を示している。第二の目的は、反芻特性が後悔や怒り情動に及ぼす影響とそのメカニズムについて検討することであった。実験の結果から、反芻特性は後悔情動や怒り情動を持続・昂進させることが示されたが、そのメカニズムとして仮定された帰属過程に及ぼす影響については明らかにされなかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	820000	0	820000
20 年度	1280000	384000	1664000
年度			
年度			
年度			
総計			2484000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：社会心理学、反芻

1. 研究開始当初の背景

近年、対人関係などをきっかけに突然表面化すると考えられる問題行動が増えている。その原因として、地域社会の崩壊や電子機器を媒体としたコミュニケーションによる人間関係の希薄化などが挙げられている。このような社会状況では、人々は悩みや問題について自分一人で考え、解決しようと試みる。すなわち、自己の注意がネガティブな情動やそれに関する原因や結果などに対して反復

的に向けられやすい。こうした認知的パターンは反芻と呼ばれている (Nolen-Hoeksema, 1991; Lyubomirsky and Nolen-Hoeksema, 1993; 1994)。反芻研究の多くは、反芻が問題解決への動機づけや集中力の低下を招き、対人場面において抑うつ情動や怒り情動などのネガティブ情動を強めたり、持続させたりするなどの非生産的な結果をもたらす可能性を指摘している (Lyubomirsky, Caldwell, and Nolen-Hoeksema., 1998; Rusting and Nolen-Hoeksema,

1998)。そこで、本研究は反芻が個人の認知や情動、または行動に及ぼす影響を検討することを目的とした。

2. 研究の目的

(1) 研究1では、個人の反芻特性を測定するための尺度作成が目的であった。具体的には国外の研究で信頼性が確認されている反芻反応尺度 (Ruminative Response Scale:RRS)の日本語版を作成し、その信頼性や妥当性について調べた。

(2) 研究2では、反芻が後悔情動や責任帰属に及ぼす影響について調べることが目的であった。後悔とは、意思決定による悪い結果や、それに対する自己責任の知覚によって生じるネガティブ情動である (Connolly & Zeelenberg, 2002)。これまで、反芻は抑うつ情動を持続、増幅させることが示されており (Nolen-Hoeksema & Morrow, 1991)、本研究では反芻が後悔情動を促すと予想した。また、反芻は自己焦点化や出来事の因果関係の解釈を含めた認知過程であり (Morrow & Nolen-Hoeksema, 1990)、自己焦点化はネガティブな出来事の原因について内的帰属を促すことが示されている (Fenigstein & Levine, 1984)。それゆえ、反芻は意思決定によって悪い結果が生じた際、自己に対する責任の帰属を強めるため、後悔情動を促すと予想した。

(3) 研究3では、反芻が後悔情動に及ぼす影響を実験室実験によって確認することを目的とした。また、人は後悔情動が予期される意思決定を避けようと行動することが指摘されている (Anderson, 2003)。それゆえ、反芻が後悔情動を強めたり、持続させたりするなら、反芻しやすい人はそうでない人よりも後悔が喚起された状況と類似した意思決定場面を避けると予想した。

(4) 研究4では、反芻の対象となる情動として怒り情動に着目し、怒り反芻特性を測定するための尺度作成を目的とした。当初、怒り反芻特性尺度は自ら作成する予定であったが、国外の研究者によって開発された尺度が存在することから、その日本語版を作成することとした。そこで、日本語版怒り反芻尺度 (Anger Rumination Scale:ARS)を作成し、その信頼性や妥当性について検討した。

(5) 研究5では、反芻が怒り情動や責任帰属に及ぼす影響を調べることが目的であった。怒りは、相手の行動が意図的で正当性の低い行動と知覚された場合に生じるネガティブ情動である (Averill, 1983; Baumeister, Stillwell, & Wotman, 1990)。それゆえ、相手の行動について意図性や正当性の低さを知覚

するほど怒りは強くなると考えられる。そこで、反芻が相手の敵意を強く帰属させるため、怒り情動を強めると予想した。

(6) 研究6では、反芻が怒り情動に及ぼす影響を実験室実験によって確認することを目的とした。怒りが喚起された人々は、自己の正当性を顕示したい、または、相手に罰を与えたいなどのネガティブ情動に対する補償行動に動機づけられるため、攻撃行動を表出しやすいと考えられる。以上のことから、本研究では、意思決定から一定時間が経過した時点の怒りについて、反芻しやすい人はそうでない人よりも強い怒りを感じ、相手の敵意を強く知覚すると予想した。さらに、反芻しやすい人はそうでない人よりも相手に攻撃行動を示しやすいと予想した。

3. 研究の方法

(1) 研究1における参加者は4年制大学の大学生141名(男52名、女89名)で、講義後、参加を承諾できる人のみ質問紙に回答するよう求められ、4週間後にも同様に回答を求められた。質問紙はRRSと林・瀧本(1991)によるBeck Depression Inventory(BDI)、伊藤・上里(2001)が作成したネガティブな反すう尺度からなる。RRSは22項目から成り、2回目の質問紙ではこれらの項目の順番を逆にした。RRSの回答は「ほとんどない」から「ほとんどいつも」の4点尺度である。

(2) 研究2における参加者は大学生183名(男性89名、女性94名)で、講義後に配布された質問紙について簡単な説明を受け、参加を承諾できる人のみ回答するよう求められた。質問紙はシナリオと質問項目からなる。シナリオの大筋は「無遅刻・無欠勤による昇給が決まる日、友人のA君とアルバイト先へ向かう途中、電車の二つの路線のうち一方を選んだところ、選んだ路線で事故が起きたため、アルバイトに遅刻してしまい、昇給が半年後に延期される。」という内容であった。参加者はシナリオを読んだ後、出来事に関する自己責任、他者責任、後悔情動をたずねる質問項目、RRSの順に回答した後、再度、出来事に関する項目に回答した。本研究では意思決定に対する責任を操作するため、シナリオにおける路線の決定について、自ら選択した自己決定条件と友人が選択した他者決定条件を設け、これを決定要因とした。反芻特性を操作するためにRRSの合計得点が低い低反芻条件と高い高反芻条件を設け、これを反芻特性要因とした。従属変数は、自己責任、他者責任、後悔情動に関する2項目の平均点で、各項目は6点尺度で測定された。

(3) 研究3における参加者は大学生39

名(男 19 名、女 20 名)で、実験室に案内され、質問紙 A に回答し、計算課題を行った後、一定の成績を収めたとしてボーナス報酬課題(6 枚のカードから 5 枚を選択する課題)を行い、質問紙 B に回答した。ボーナス報酬課題において、参加者は最大で 1000 円、最小で 0 円のボーナスを獲得できると告げられるが、後悔情動を喚起させるため、実際は、全員が 0 円となるよう操作された。一定時間経過後、参加者は再度、質問紙 B に回答し、計算課題を行い、一定の成績を収めたと告げられる。ただし、今回は 1 回目と同様のボーナス報酬課題を行うか、確実に 500 円を獲得するかについて意思決定するよう求められた。本研究では反芻特性要因を操作するため、質問紙 A における RRS 得点が高い高反芻条件とそれが低い低反芻条件を設けた。時間要因を操作するため、意思決定後、後悔情動を測定するまでの時間について 1 時間条件と 2 時間条件を設けた。従属変数として、意思決定から一定時間経過した後、質問紙 B において後悔情動や自己責任の知覚を測定した。また 2 回目のボーナス報酬課題に挑むか、確実に 500 円獲得するかを選択するよう求め、後者を意思決定回避行動として測定した。

(4) 研究 4 における参加者は大学生 189 名で、講義後、参加を承諾できる人のみ質問紙に回答するよう求められ、4 週間後にも同様に回答を求められた。質問紙は ARS 以外に、研究 1 で作成した日本語版 RRS、鈴木・春木 (1994) による State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI) の日本語版と、安藤ら (1999) による日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙からなる。ARS は 19 項目から成り、2 回目の質問紙ではこれらの項目の順番を逆にした。ARS の回答は「ほとんどない」から「ほとんどいつも」の 4 点尺度である。

(5) 研究 5 における参加者は 57 名の大学生と大学院生で、講義後に配布された質問紙に参加を承諾できる人のみ回答するよう求められた。質問紙はシナリオと質問項目からなる。シナリオの大筋は「久しぶりに会った友人に頼まれて車を貸したところ、友人がその車を傷つけてしまう」という内容であった。参加者はシナリオを読んだ後、出来事による友人への怒り情動と友人の責任、意図知覚に関する質問項目、ARS の順に回答した後、再度、出来事に関する同じ項目と過去の怒り体験の想起についてたずねる項目に回答した。本研究では、怒り情動を操作するため、シナリオにおける友人の運転が乱暴な強怒り喚起条件と、運転が丁寧な弱怒り喚起条件を設け、怒り要因とした。また、反芻特性を操作するために ARS の合計得点が低い低反芻条件とそれが高い高反芻条件を設け、これ

を反芻特性要因とした。従属変数は、怒り情動、友人の責任、意図に関する 2 項目の平均点で、各項目について 6 点尺度で測定した。

(6) 研究 6 における参加者は大学生 44 名(男 23 名、女 21 名)で、実験室で質問紙 A に回答し、計算課題を行った後、遠隔地にいる別の参加者の成績と合わせてボーナス報酬が決定され、それを 2 人で分配すると告げられた。ここで、遠隔地にいる別の参加者は実験協力者で同じ建物の中にいた。まずは別の参加者がボーナス報酬の分配を行い、参加者の分配額を 50 円とすることがメールで伝達された。その後、参加者は質問紙 B に回答した。一定時間後、参加者は再度、質問紙 B に回答し、計算課題を行った。今回は参加者が別の参加者の成績と合わせたボーナス報酬として 1000 円を受け取り、それを相手に分配するよう求められ、メールで分配額を伝えた。本研究では反芻特性要因を操作するため、質問紙 A における ARS 得点が高い高反芻条件とそれが低い低反芻条件を設けた。時間要因を操作するため、別の参加者の分配後、怒り情動を測定するまでの時間について 1 時間条件と 2 時間条件を設けた。従属変数は、第相手の報酬分配から一定時間経過した後の質問紙 B において測定された怒り情動や相手の敵意の知覚に関する項目得点と、参加者が相手に分配する金額で、これを攻撃行動の指標とした。

4. 研究成果

(1) 研究 1 では、1 回目と 2 回目の RRS の合計得点について相関分析を行ったところ、 $r = .810$ であった。また 1 回目と 2 回目の項目間の信頼性係数は $\alpha = .903$ と $.886$ であった。それゆえ、日本語版 RRS の十分な信頼性が確認された。RRS の構成概念妥当性について、本研究では、先行研究から 4 因子を仮定し、探索的因子分析 (主成分分析・固有値 1 基準因子抽出・バリマックス回転) を行ったところ、説明率が 55.94% であった。つぎに、各因子に対する負荷量が .40 以下、または複数の因子に .40 以上負荷した項目 (5,7,10,13,14) を除いて再分析したところ、説明率は 60.43% で、これは Roberts, et al. (1998) や Treynor, et al. (2003) のモデルよりも高かった。本研究ではこれら 4 因子を抑うつ型反芻、熟考型反芻、自己批判型反芻、行動型反芻と定義した。それゆえ、RRS は 4 つの下位カテゴリーで構成されると思われる。また、RRS は BDI やネガティブ反すう尺度と有意な正の相関係数にあった ($r = .644$; $.594$)。これらは日本語版 RRS の妥当性を示している。

(2) 研究 2 の結果は、自ら意思決定した状況では後悔が喚起された直後の時点で、後

悔情動について反芻傾向による差はないが、時間経過によって反芻傾向が低い人は後悔が弱くなるのに対して、反芻傾向が高い人は維持されていることを示していた。このことは反芻が後悔情動を持続させることを示唆している。一方、自ら意思決定した状況において、反芻しやすい人はそうでない人よりも意思決定に関する自己責任を強く知覚していたが、時間経過に伴う変化は見られなかった。これらのことから、反芻は後悔情動を喚起させる自己責任の知覚を促すため、後悔情動の持続させる可能性を示唆された。

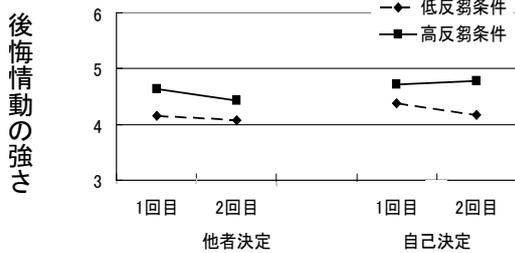


図1 後悔情動に関する平均値

(3) 研究3の結果は、失敗体験から一定時間が経過した後、反芻しやすい人はそうでない人よりも強い後悔を感じることを示していた。研究2の結果とあわせて、反芻は後悔情動を持続させる効果があると考えられる。ただし、失敗体験の内容によっては反芻が後悔情動を強める可能性もあるだろう。自己責任の知覚について、反芻要因による統計的に有意な効果は示されなかったが、1時間が経過した時点で反芻しやすい人はそうでない人よりも自己責任を強く知覚していた。つぎに、反芻が意思決定回避行動に及ぼす影響は明らかにされなかった。ただし、統計的な有意差はないものの、高反芻条件において意思決定回避を選択した人数は、それに挑むという選択をした人数よりも多く、低反芻条件よりも多かった。これらのことから、反芻は後悔情動を促すことが明らかにされ、反芻が自己責任の知覚や意思決定回避行動に及ぼす影響については明らかにされなかった。

(4) 研究4では、1回目と2回目のARSの合計得点について相関分析を行ったところ、 $r = .764$ であった。また1回目と2回目の項目間の信頼性係数は $\alpha = .928$ と $.939$ であった。それゆえ、日本語版ARSの十分な信頼性が確認された。ARSの構成概念妥当性について、探索的因子分析(主成分分析・固有値1基準因子抽出・バリマックス回転)を行ったところ、3因子が抽出され、説明率は59.76%であった。本研究では、先行研究と同様にこれらの因子を怒り再考因子、怒り記憶因子、報復思考因子とした。また、ARSはSTAXIの下位カテゴリーである怒り表出や怒り抑

制カテゴリーと正の相関関係にあり($r = .332; .433$)、Buss-Perry攻撃性質問紙における敵意知覚、身体的攻撃と正の相関関係にあることが示された($r = .419; .271$)。また、RRSとも正の相関関係にあることが示された($r = .637$)。これらは日本語版ARSの妥当性を示している。

(5) 研究5の結果は、怒り喚起が強い状況において、反芻特性による差はないが、怒り喚起が弱い状況において、怒り情動を反芻しやすい人はそうでない人よりも強い怒りを感じ、それは強い怒りが喚起された状況と同程度の強さであった。ただし、時間的変化に伴う反芻の効果は示されなかった。また、喚起された怒りの強さにかかわらず、反芻しやすい人はそうでない人よりも相手の責任を強く知覚し、意図的であったと認知する傾向が示された。これらのことは反芻が怒りの対象となる相手の責任を帰属しやすく、相手の行動を意図的と知覚しやすいため、強い怒りを喚起させる可能性を示唆している。

(6) 研究6の結果は、他者による不公平な資源分配から1時間経過した時点において、反芻しやすい人はそうでない人よりも強い怒りを感じることを示していた。研究5の結果とあわせると、反芻は怒り情動を持続させる効果があると考えられる。ただし、後悔情動と同様に、怒り体験の内容によっては反芻が怒り情動を昂進させる可能性も十分に考えられるだろう。

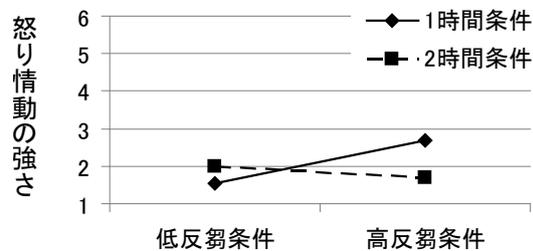


図2 怒り情動に関する平均値

次に、相手の敵意の知覚と相手への報酬分配額について、高反芻条件と低反芻条件間に統計的な有意差は示されなかった。ただし、1時間経過した時点において、反芻しやすい人はそうでない人よりも強い敵意を知覚し、相手への報酬分配額が少なかった。これらの平均値のパターンは、反芻が怒り情動に関するパターンと類似していた。これらのことから、反芻は怒り情動を促すが、それが敵意の知覚や攻撃行動に及ぼす影響は今後さらに検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 八田武俊 反芻が後悔情動と責任の帰属に及ぼす影響. 日本社会心理学会第 49 回大会. かごしま県民交流センター. 平成 20 年 11 月 3 日.
- ② 八田武俊・大淵憲一. 日本語版反芻反応尺度(RRS)の妥当性と性差に関する研究. 日本応用心理学会 75 回大会. 横浜国立大学. 平成 20 年 9 月 14 日.
- ③ 八田武俊・大淵憲一・八田純子. 日本語版反芻反応尺度(RRS)の信頼性に関する研究. 東北心理学会 62 回大会. 東北大学. 平成 20 年 7 月 21 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八田武俊